

だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター

日時：2011年11月13日（日曜日）

場所：山形市避難者交流支援センター

山形市総合スポーツセンター内（山形市落合町1番地）

毎月第2日曜日の午前、山形市内（芸工大前公園、雨天及び冬期間は滝山公民館）にて、長年にわたり開かれ続けているのが“楽描きだがしや楽校”です。

大きなベニヤ板に、みんなで好き勝手に絵を描いていきますが、絵を描きながら、コミュニケーションするのが目的です。

時には数人しか集まらないこともあります。それでも2007年から休まず続けてきました。

1回の“楽描きだがしや楽校”だけ見ますと、これでコミュニケーションの輪・人とのつながりの輪が広がっているのだろうか、と思います。しかし、長年続けていることで、知らぬ間に、その輪は大きく広がっていました。

まさに、一人ひとりの力は小さくでも、ひとつひとつは小さくでも、継続することで大きな力になるのと同じで、『継続』することの大切さを私たちに教えてくれる“だがしや楽校”です。

全国の“楽描きだがしや楽校”は“だがしや楽校”仲間にも高く評価されています。

2011年9月11日（日曜日）。あれから、ちょうど半年です。

この日も“楽描きだがしや楽校”が開かれました。

この日、私は取材できませんでしたので、“楽描きだがしや楽校”を主宰しているRikuさん（山形市）から“だがしや楽校”のメーリングリストに送られた文章から抜粋して、この時の様子をご紹介します。

11日は毎月恒例の楽描きだがしや楽校を開催しましたが、少し変わった体験とともに、現実にも触れました。開催場所は、東北芸工大の近くの公園です。

いつものように楽描きの準備をしていると・・・（以下は、楽描きの脇で始まった山形市長選挙の候補者による立会演説の様子を記しています）

（それが終わり）静かになった後、近所のよく顔を出してくれるおばさんが来てくれて、選挙中心の話にはなりませんが、しばらくおしゃべりをして、心が和んでくると、子供たちも少しずつ寄ってきました。

ある子が不思議そうに楽描きを見ていたので、少し話しかけていたら、どうやら地元の子じゃなかったようなので、もしやと思い、「最近転校してきたの？」と尋ねたら、福島県南相馬市より夏休みに引っ越してきた子でした。兄弟は3人、お母さんと引っ越して来て、お父さんは南相馬市で仕事を続けているそうです。

とっさにかける言葉も無く、「友達できた？」「出来たよ！」「良かったね！」との短い会話しかできませんでした。でもその子は元気いっぱい自転車に乗りのびのびと遊んでいました。

その後もまた2人の兄妹がやってきましたが、あまり見かけない子だったので、ちょっと声を掛けたら、「お父さんのアパートが直ぐそこにあるので天童から遊びに来ました。」との事で、これって親が別居中？と思い、変な事は聞けないなと思ったら、男の子が「僕たちは南相馬から天童に避難して暮らしています。」と話してくれました。

そしてアパートに一人住むお父さんは、南相馬市の職員で、山形市内で最近まで避難所となっていた山形総合スポーツセンターで避難者の相談・支援の仕事をしているそうです。しかし、そのお父さんは9月で任務を終え、南相馬市に戻らなければならないそうです。

おそらくお母さんがそう言っているんだと思いますが、男の子が「たぶん一生南相馬には戻らない」とつぶやいたので、「でも帰りたいよね？」とさり気なく聞いたら大きく頷き、「お父さんが帰ってきてもいいよって言ってくれたら帰れるよ！」と笑顔で答えてくれました。

お父さんを信頼し、希望を持って生きているんだなと実感できました。

ちょっとグッとくるものがありました。

大震災で然程ダメージを受けなかった山形県民の自分が、大きなダメージを受けて福島から山形にやってきた兄妹に勇気と元気を貰ったようです。

今回（9月11日）のだがしや楽校は、楽描き自体はまともにできませんでした。その場を開いた事により貴重な体験と出会いを得る事が出来ました。現在の山形市は避難所も無くなり、多くの避難者が各地域に移り住み、避難者の苦悩・実態・現実がだんだん見えなくなってきた中で、改めてその現実に触れる事が出来ました。

だがしや楽校で何が出来るんだろう？ 自分たちは何が出来るんだろう？ 沸々と疑問が湧いてきます。

あの子たちを早く帰してあげたいけど、相手が放射能なだけに何が出来る訳ではない。膨大な時間が必要になるのは間違いない。せめて親子・家族と一緒に暮らせるようにと願う。

いつまでも安心して暮らせている街・山形でありたいと思うし、その為に、普段の生活をコツコツと積み上げて、小さな事でもやれる事を精一杯やっていく。どんな形にせよ、少しでもあの子たちの役に立ちたい。

これまで被災者・避難者のことまでは考えることができなかったRikuさん（と本人は言いますが、Rikuさんのことだから、心のどこかでは、ずっと思っていたはずです）は、南相馬市のお子さんから勇気と元気をもらったことで、自分たちができることとして、山形への避難者との“だがしや楽校”を開こうと決意します。

10月1日の芋煮会で“だがしや楽校”仲間へ相談したRikuさん、翌10月2日には、山形市避難者交流支援センターへ行きました。

6月に開設している米沢市避難者支援センター“おいで”と同様、山形へ避難している人たちのために山形市が7月、山形市総合スポーツセンター内に開設したのが、山形市避難者交流支援センターです。

山形市では、山形市総合スポーツセンターが避難所となりました。その後、避難者の人たちは二次避難先に移りましたが、ここが最も知られている場所であることから、この一角にセンターを開設しました。

センターには、避難者向けの様々な情報が集まります。それは、避難者の故郷からの情報はもちろん、山形から避難者の人たちへ発信される情報も集まります。情報だけでなく、山形と避難者の人たちとの交流の場なども設けられています。

それで、Rikuさんも山形市避難者交流支援センターを訪ねたわけです。

山形市避難者交流支援センターでは、“だがしや楽校”開催に、とても協力的でした。

Rikuさんは、何度か山形市避難者交流支援センターへ足を運び、センターの人たちと打ち合わせをしました。その結果、ちょっと狭いけど、山形市避難者交流支援センター（第一会議室）内で、とりあえず、こぢんまりと“だがしや楽校”を開くことになりました。

そして、第1回目の開催日を11月13日としました。

11月13日・・・第二日曜日です。そうです。2007年から続いていた“楽描きだがしや楽校”が途切れることになります。ここに、Rikuさんの並々ならぬ思いを感じることができます。

“楽描きだがしや楽校”は途切れるかもしれませんが、Rikuさんの、Rikuさんたちの、Rikuさんの仲間たちの、そして山形の“だがしや楽校”は途切れません。

Rikuさんの思いは仲間たちにも共感を呼び、多くの“だがしや楽校”仲間が参加することになりました。

山形市避難者交流支援センターの支援も大きいです。

広報はもちろん、センターに関わっているボランティアの人たちにも呼び掛け、“だがしや楽校”を手伝ってくださったのです。

しかし、初めてのことで、どれくらい子どもたちが集まってくれるのかも想定できません。楽しみ半分、不安半分の中で、当日を迎えました。



2011年11月13日（日曜日）朝 所によって霧 曇り一時日差す 曇り時々小雨または雨

【だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター】

この日の“だがしや楽校”は午前10時30分から始まりましたが、私は午前中“だがしや楽校”関連活動として、山形市内で開かれた子ども会関係の会に出席していましたので、現場に到着したのは、正午頃でした。

センター入口には、“だがしや楽校”の幟が飾られ、Yoshiさん（芸工大院生）によるミニ黒板による“だがしや楽校”表示もありました。“楽描きだがしや楽校”を紹介するミニパネルも掲示されています。



中を覗き込みます。大勢の人です。にぎやかです。子どもたちの歓声がいっぱいです。大盛り上がりです。「誰も来ないのではないか」なんていう心配がどこかに吹き飛んでいました。

おみせは3つです。

片桐さん・Ishiさんらによる東北芸術工科大学（芸工大）の“巻くだけまゆこさん屋台”。

天童市のAshinoさんによるお馴染み“パステル画”。

Rikuさん・Kondoさんらによる“マツボックリツリー”。

どのお店も大盛況です。

“巻くだけまゆこさん屋台”では、子どもたちが打ち解けている様子を感じました。

“パステル画”では真剣に、そして楽しく描いていました。

“マツボックリツリー”でも楽しそうに作っていました。マツボックリでこのような遊びができることに感激しているおかあさんもおりました。それは、“パステル画”も“巻くだけまゆこさん屋台”も同じでした。



お昼休みです。ミーティングもなく、なんとなく始まったということで、ここで自己紹介です。先にご紹介したとおり、“だがしや楽校”仲間と、ボランティアの人たちが集まりました。これだけでも凄いことです。新たな出会いがありました。

午後のスタートである 13 時前には、早くも子どもたちが集まり始めました。

午後は“巻くだけまゆこさん屋台”に代わって、スライムです。スライムでも子どもたちは大はしゃぎです。「コンニャクができた！」と大喜びする男のお子さん。自ら液を流して、ちょっとこぼしてしまったけど、積極的に遊ぶ女のお子さんなど、見ているだけで楽しくなります。

午後には、音楽仲間の丹波恵子さん・ゆき彦さんがセンターに来られました。お二人も避難者との関わりを模索しており、この日の“だがしや楽校”を機会に、センターを訪問したわけです。

ちなみに、ゆき彦さんは、石巻市の仮設住宅でコンサートを開いています。それは、ラ・フランスと音楽とのコラボレーションで、お世話になった人が石巻市にいることから、その恩返しのために開いたものです。



大盛り上がりの“だがしや楽校”もアツと言う間に終わってしまいました。

これで、いつもですと“だがしや楽校”仲間同士で、お茶をしながら振り返りすることが多いのですが、この日はセンターの方の呼び掛けで、終わりのミーティングが開かれました。これは、山形市避難者交流支援センターというオフィシャルな場（山形市防災課管轄の場）で“だがしや楽校”を開いたからかと思われます。

終わりのミーティングでは、振り返っても感想が出されましたが、主な感想は
◎大勢の子どもたちに来てくださって、大成功。

◎ただ、イス・テーブルだったので、ちょっと狭くなってしまった。

でも、それだけ、大盛況だったわけで、本当に良かったです。

受付で記帳した人だけでも 97 名。実際には 100 名を超える人たちが集まったとのことでした。

誰でも入れるセンターとしては、“だがしや楽校”が盛り上がりすぎても「嬉しい悩み」になってしまうようで、イス・テーブルだったことも含めて、これからの検討事項になりました。

私が振り返って特筆したいのは、山形市避難者交流支援センターの協力ぶりです。

“だがしや楽校”を開いている間は温かく見守ってくださいましたし、終わりのミーティングを開いて、きちんと振り返りをされました。

これは“だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター”が、この日だけではなく、月 1 回程度でも継続して開きたいという思いがあるからです。そこで、ボランティア募集から場所の確保まで、いろんな面で支えていました。

これだけ大勢の子どもたちが集まったことについて、センターの方からは「対応が大変で続かないのではないのでしょうか」と心配の言葉をいただくほどでした。Rikuさんは「大丈夫です。皆さん、経験がありますから」と答えていました。

Rikuさんがおっしゃるとおりですが、一方で私も、センターの方と同じ思いも持ちました。

“楽描きだがしや楽校”と違って、これは「避難者との交流」という目的がある“だがしや楽校”です。それも月1回は開きたいということです。そうなると、大変さが出てくるのではないかと心配します。

“だがしや楽校”とは、できることで、自分たちが楽しむことを大切にして、そしてコミュニケーションしながら、人とのつながりの輪を広めることができれば良いね・・・というものです。ですから、無理は禁物です。

それでも、Rikuさんの思いで、この日も十数名の人たちが“だがしや楽校”スタッフとして集まりました。そう考えますと、長年継続してきたRikuさんの“楽描きだがしや楽校”の凄さをあらためて感じます。

でも、せっかく山形市避難者交流支援センターという場で“だがしや楽校”を開くことができるのであれば、長く続けるために“だがしや楽校”的視点で考えますと、“だがしや楽校”に共感し、「自分も“だがしや楽校”を開きたい」と思う地元住民・山形市民がひとりでも増えることが大切になります。

“だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター”の目的は、避難者と地元住民・山形市民との交流です。地元・山形の人による“だがしや楽校”仲間が増えることで、避難者との交流の輪が広がりますし、“だがしや楽校”を開く人の輪も広がり、“だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター”は継続できます。

山形市避難者交流支援センターには、支援者・ボランティアを中心に、多くの人に関わっていますので、そこからのネットワークでも良いでしょう。

Rikuさんによりますと、山形市民のセンターあるいは避難者への関心は低くなっているそうです。そうであれば、山形市民が山形市避難者交流支援センターともっと関われる手段として“だがしや楽校”を利用することもあります。

さらには、避難者の人たちが“だがしや楽校”で遊んだ体験をもとに、「自分たちでも“だがしや楽校”をやってみよう」という気持ちになっていくことも大切です。これがある意味、究極の目的です。

第1回目をやったばかりですので、まだ先のこともかもしれません。センターの方も「今のところが、お客さんとして来るでしょう」と言います。そのとおりだと思います。

しかし、避難者自ら、母親同士のサークルを作るなどの動きは、すでにあります。

“だがしや楽校”が、ほかのイベントと違うのは、おみせを出す人と、お客さんである人との関係性を無くし、みんながおみせを出す人になったり、お客さんになったりすることです。そこで、本当の交流が生まれ、自ら「やってみよう」という気持ちが生まれます。

避難者への支援とは、単に支えるだけでなく、自ら動く気持ちを育み、それを支えることなのです。そういう意味でも、今こそ“だがしや楽校”です。

“だがしや楽校”とは『自分みせ』です。

“だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター”を開く意味は、ここにもあります。

この日、私は初めて山形市避難者交流支援センターに入りました。

広さは、米沢市避難者支援センター“おいで”とほぼ同じでしょうか。

“おいで”が南相馬市からの方がスタッフの中心であるのに対し、山形は山形市のスタッフが中心でした。また、米沢への避難者の大半が福島からであるのに対し、山形の場合は福島だけでなく宮城・岩手からの避難者もいることもあり、“おいで”と山形市避難者交流支援センターでは、雰囲気微妙に違います。



この日は、“だがしや楽校”が終わった後も、Rikuさんと共に、しばらくセンターにおりました。その間、避難者の人たちが次々に訪れます。センターには福島民報と福島民友などの新聞も置かれているのですが、夕方には残りが僅かになりました。

掲示物などの情報を真剣な表情で見ていく人もおります。このセンターの役割の大きさを実感します。

センターに関わっているFukaさんとは、子どもの遊びについて、しばらく談義しました。談義からは、今の状況では、子どもの遊びの本質も見失いそうになっていることがわかります。山形は自然がいっぱいです。しかし、本来の子どもの遊びが育まれているかという点、そうでもありません。どうしてなのでしょう。



最後に、私個人的なことです。今回は避難者との交流が目的の“だがしや楽校”ということで、カメラによる撮影は限定的にしました。従って、ほとんどカメラを持たずに“だがしや楽校”を見ていました。

カメラを持つことが私の“だがしや楽校”に於ける『自分みせ』です。では、カメラを持たなかったら、私はどうなるのでしょうか。

それでも楽しいです。子どもたちが、だがしや楽校を開いている皆さんが、楽しそうにしている様子を見ているだけで、楽しくなります。「やっぱり“だがしや楽校”って良いな～」と思います。

私も子ども頃は、もちろんみんなと遊びました。お寺の境内でも遊びましたし、畑や田んぼで遊びました。

でも、実は、体育館やグラウンドの隅っこで、みんなが遊んでいるのを見ていて、楽しんでいることがほとんどだったのが私でした。しかも、見たことを「言いたい」という気持ちもありまし

た。これが、ある意味、今の私の原点です。ただ、当時の私には「言いたい」つまり「伝えたい」気持ちを具体的に実行する方法を知りませんでした。

人には「見る楽しさ」「伝える楽しさ」があることを、あらためて私は申し上げたいです。私の場合は、それに特化しているかもしれません。そして、それが私の『自分みせ』です。

この日の“だがしや楽校@山形市避難者交流支援センター”を通して、私はやはり「見て伝える」「だがしや楽校”にこだわるべきであると感じました。

なぜなら、そのこだわりを無くすことで、自分の“だがしや楽校”を見失ったら、到底“だがしや楽校”普及活動など、できなくなるからです。

企画・制作・編集・文責

山口充夫

だがしや楽校コーディネーター